

意味分野別構造から見た韓日語彙の特徴

-基幹部を構成している語彙の比較を中心に-

金直洙*

目次

1. はじめに
 2. 研究の方法
 3. 基幹語彙の選定
 4. 意味分野別構造分析法による考察
 5. まとめと今後の課題
-

1. はじめに

語の集合である語彙の基本的な性格として情報を伝達し合う上で重要な働きをする意味的側面と、その要素の数の膨大さを表す数量的側面がある。このような語彙を研究する概念として、田中章夫 (1978) は語彙を「語のまとまり」と見る立場と「語の集まり」として捉える立場があるとしている¹⁾。これは田島毓堂 (1992) が言う「語彙元素論」と「語彙総体論」にほぼ当てはまるものである²⁾。語彙元素論は個々の語を対象とする分野であり、語彙総体論は語の集合を対象とする分野である。語彙総体論は歴史が浅く、他の分野に比べてかなり遅れている。その原因として考えられるのは語彙はその要素の数が膨大であり、音韻や文法とは違ってその体系性が非常に複雑であるため全体の姿を明確に把握するのが容易ではないし、研究方法の未発達も相対的に遅れた一つの要因であると言える。語彙を総体として扱って研究を行う分野に「比較語彙研究」³⁾がある。比較語彙研究では「意味分野別構造分析法」(The Structural Analysis of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories) ⁴⁾ を使って

* 우송대학교 강의전담 일본어학

1) 田中章夫 (1978) 『國語語彙論』(明治書院) P.1~2

2) 田島毓堂 (1992) 「語彙論の課題—集団的規範と個別的實現—」(『名古屋大學國語國文學』71)

3) 田島毓堂 (1995) 「比較語彙論の構想—異文化比較研究のために—」(『國際開發研究フォーラム2』名古屋大學大學院國際開發研究科)

總体としての語彙が持つ數量的側面と意味的側面の特徴を詳細に分析することができる。それが語彙の分析法として有効な視点を提供するという事は阪倉篤義（1960）、淺見徹（1971）、田島毓堂（1995）によって分かる。

本稿では、語彙總体論の立場から複数の資料（小説、教科書、新聞、雑誌）の中から多方面にわたって出現しながら割合よく使われる語彙を「基幹語彙」として選定する。選定した「基幹語彙」を用いて品詞別の意味構造、語種別の意味構造、全体の意味分野別構造の三つの分析を通して日本語と韓國語の基幹部を構成している語彙の意味分野別構造の特徴について述べてみたい。

2. 研究の方法

2.1 資料の選定

語彙總体論の立場からの比較語彙研究では、どのような性格を持つ語彙を比較の対象にするかがたいへん重要な問題になる。即ち、ある特定の一つの資料、または作品の語彙を対象にするのか、それとも、一言語体系としての語彙を比較の対象にするのかによって、その姿を正確に把握することができるのである。本稿では、複数の分野の語彙を対象として語彙調査を行い、その中から、頻度、使用率、いくつの分野にわたって出現するかなど、一定の限定を伴った範囲内の語彙を比較の対象として用いる方針である。それは日韓兩言語にとって骨格のような部分として存在する規範語彙的な性格をもつものであろう。このように、規範性の強い語彙を選定する場合には、対象として用いる資料の量が多ければ多いほど規範性は強くなるのであるが、現実的にはいくら調査の範囲を広げても切りがないので、調査できる量は限定せざるを得ない。そこで、本稿では、小説、新聞、雑誌、教科書に分野を限定して調査を行うことにした。各分野別の資料は以下のとおりである。

(1) 小説

小説は1995年から1998年の間で、兩國の文學賞⁵⁾を受賞した現代短編小説の中からそれぞれ5作品ずつ抽出して語彙調査を行った。

(日本語)

保坂和志 『この人の闕』<文芸春秋1995年3月>

4) この分析法はもともと阪倉篤義（1960）から始まり、淺見徹（1971）によって継承され、田島毓堂（1992）で「意味構造分析法」と名付けたのであるが、その後、湯淺茂雄氏の提案により「意味分野別構造分析法」と称するようになった。

5) 日本は芥川賞受賞作および候補作、韓國は李箱文學賞受賞作を資料として用いる。

又吉榮喜 『豚の報い』<文芸春秋1996年3月>
柳美里 『家族シネマ』<文芸春秋1997年3月>
辻仁成 『海峡の光』<文芸春秋1997年3月>
弓透子 『ハドソン河の夕日』<文芸春秋1998年3月>

(韓国語)

김향숙『추운 봄날 (寒い春の日)』<文學思想社1995>
윤대녕『천지간 (天地間)』<文學思想社1996>
김이태『궤도를 이탈한 별 (軌道を離脱した星)』<文學思想社1996>
김지원『사랑의 예감 (戀の予感)』<文學思想社1997>
박상우『말무리 반도 (マルムリ半島)』<文學思想社1998>

(2) 新聞

日本語はCD—毎日新聞'99と、CD—毎日新聞2000を、韓国語はインターネット上の朝鮮日報データベースの検索システムを利用した。調査の方法は以下のとおりである。

- ①調査の範囲は1999年1月から2000年12月までにする。
- ②調査対象は<政治、経済、社会、文化、教育、スポーツ、芸能>に関するインタビュー、対談、座談の記事のみにする。
- ③各記事のタイトル、電話番号、ホームページ番号などは除外する。
- ④文字数は300文字以上のある程度長い記事のみにする。

(3) 雑誌

日本語は岩波書店編集部編『これからどうなる21—予測・主張・夢— (CD-ROM版)』(1999.12)の中の<政治・法律>、<経済・産業>、<社会・環境>、<文化・学問・芸術>、<科学・技術>、<教育・子供・家族>、<スポーツ・芸能・趣味>の七つの分野の記事を対象とした。

韓国語はインターネット上の週刊誌『주간동아 (週刊東亞)』(2000年1月6日、13日、20日、27日)の中の<カバーストーリー>、<政治>、<経済>、<社会>、<文化>、<情報・科学・医学>、<スポーツ>の七つの分野の全記事と、他の分野に比べて記事数が少なかった<スポーツ>の分野は(1999年12月)の中から補充した。

(4) 小學校教科書

小學校教科書は既存の語彙調査資料を利用した。日本語の資料は<島村直己「小學校低學年用國語教科書の用語」國立國語研究所報告74『研究報告集—4—』秀英出版、1983年>と、<『兒童の作文使用語彙』國立國語研究所報告98 東京書籍 1989年>に収録されている小

學校低學年用（1、2年生用）の語彙を対象にする。

韓国語の資料は<『國民學校教育用語彙（1、2、3年生用）』국어연구소（國語研究所）1986>の語彙を対象にする。

（5）中學・高校社會科教科書

中學・高校教科書も既存の語彙調査資料を利用した。日本語の資料は<『中學・高校教科書の語彙調査』[フロッピー版] 國立國語研究所言語處理データ集6（1994年3月）>の中學歴史、公民と、高校倫理社會の資料を対象にする。

韓国語は<『中學科書語彙表（國語・歴史）』국어연구소（國語研究所）1988>と、<『中學科書語彙表（道徳・社會）』국어연구소（國語研究所）1989>の中の中學歴史と、社會の資料のみを対象とする。

2.2 語彙調査の基準

上記で述べた日本の資料間においてはその違いが見られる。即ち、小學校教科書の調査ではa單位⁶⁾を採用しているが、中學校教科書の調査では、/新しい/仏教/、/天正11年/完成した/のように文の構成にあずかる要素（いわゆる文節）にもとづく長い單位と、語の構成にあずかる要素（いわゆる最小單位）にもとづく短い單位の二種の調査單位を採用している。

一方、韓国語の語彙調査の基準においての違いはアラビア數字、英語の表記、固有名詞などを採用するかどうかの違いが見られる。以上のことから次の二つの観点から語彙調査の基本方針を立てた。

- 一つ目は、日韓兩言語において同等の基準で語彙調査を行うこと。
- 二つ目は、各資料間の調査基準の整合性を保たせること。

上記の二つの観点を考えて次のような新しい基準で再調査を行った。

- (1) 附屬語は調査対象から除外する。
- (2) 人名の姓と名は分割し、姓は一單位とするが、名は対象から除外する。また、地名、人名などのに付く行政区畫の單位、官職名、接尾辭「さん、さま、ちゃん、氏、君、殿」、「씨(氏)、군(君)、님(さま、殿)」などは一單位と認める。
- (3) 記号類などは除外する。
- (4) 外來語は認めるが、アラビア數字、英語表記は除外する。その際、「～本、～歳、～枚」などの助數詞は一單位と認める。
- (5) 活用語は基本形に直して處理する。

6) 助詞・助動詞をすべてはすし、複合語は、ほぼ一回結合（一次結合）のものを一單位とするものである。

(6) 日本語の「サ変動詞」と、韓国語の「하다 (する) 動詞」は一単位と認める。

このような基準で再調査を行った結果、日本語は異なり38,134語、延べ510,182語、韓国語は異なり28,719語、延べ469,763語が得られた。各分野別の異語数と延語数は以下のとおりである。

<表1> 各分野別の異語数と延語数 (日本語)

分野	小説	新聞	雑誌	小学校教科書	中學・高校教科書
異語数	10,848	16,696	12,495	7,735	12,856
延語数	63,369	123,625	74,543	132,525	116,120

<表2> 各分野別の異語数と延語数 (韓国語)

分野	小説	新聞	雑誌	小学校教科書	中學教科書
異語数	8,976	13,499	11,187	6,063	9,733
延語数	59,169	112,723	66,902	91,023	139,946

3. 基幹語彙の選定

3.1 基幹語彙について

「基幹語彙」とは、林四郎 (1971) の造語である。林四郎が新聞の語彙調査から、「基本語彙」を求めようとした時、これまで「基本語彙」と言われている概念を細かく五つに分けているが、「基幹語彙」はその下位の概念として分類されたものである。それを引用すると次のとおりである。

- (1) 基礎語彙—意味の論理的分析によって求められた半人工的な語彙
- (2) 基本語彙—特定目的のための「○○基本語彙」
- (3) 基準語彙—標準的社會人としての生活に必要な語彙
- (4) 基調語彙—特定作品の基調を作るのに働く語彙
- (5) 基幹語彙—ある語集団の基幹部として存在する語彙

さらに、「基幹語彙」の特徴について次のような記述が見られる。

基幹語彙とは、ある語集団の中に、その集団の骨格のような部分として、その集団をささえらるる基幹的部分として、現に存在する語の部分集団を呼ぶ。基幹語彙が基礎語彙から基準語彙ま

でのものと大いに違うところは、要請によって空に描き出される仮説的存在ではなく、現に實在する実体であることである⁷⁾。

このように「基幹語彙」は、ある言語集団の基幹部を成している語の集合として存在しながら多方面にわたって割合よく使われる重要度が非常に高い語の集合をいう。また、「基礎語彙」のように、その語の使用頻度を考えに入れない半人工的な存在ではないということと、「基本語彙」のように特定の目的と用途に応じて選定できる存在ではなく、ある語集団の中に存在しながら最もストレートに語彙調査の結果を反映する存在であると言える。

3.2 基幹語彙選定の試み

林四郎（1971）は昭和41年の朝日、毎日、讀賣の三紙を語彙調査した「新聞語彙調査」のうち、度数10以上の5417語を対象として話題別に12層に分け、語がいくつの層にわたって出現するかを表わす「廣さ」と、頻度の高低を表わす「深さ」を手がかりにして、「新聞基幹語彙」1,004語を選定した。一方、土屋信一（1992）は高等學校社會科教科書5冊を対象として、教科書5科目（倫理社會、政治經濟、日本史、世界史、地理）の五つの分野をそのまま採用して5層に分けて「廣さ」にし、「深さ」は出現頻度を採らず、各教科書の累積使用率の分布を各語の「深さ」の度合いにして2,061語を社會科「基幹語彙」の候補として選定している。上記の二つの先行研究における「基幹語彙」選定の基準では二つの共通点が見られる。つまり、語がいくつの層にわたって出現するかを表わす「廣さ」と、頻度の高低を表わす「深さ」を手がかりにしている点である。しかし「深さ」の尺度において、林四郎は「深さ」の尺度として各語の出現頻度を採ったが、土屋信一は各教科書の累積使用率を尺度にしている。土屋信一はその理由として「生の出現頻度は調査集団の大きさに左右されやすいからである」と述べている。

本稿では、まず「廣さ」は五つの分野をそのまま採用して5層に分ける。そして、「深さ」は土屋信一が提示した累積使用率を「深さ」の尺度として採る。その理由は使用頻度だけを「深さ」の尺度にすると各分野で幅廣く使われる低頻度の語が資料間の規模の差によって選定の対象から除外される可能性が高いからである。各語の累積使用率を「深さ」の尺度にすると資料間の規模の差による問題をある程度補うことができると思われる。

7) 林四郎（1971）「語彙調査と基幹語彙」（『電子計算機による國語研究Ⅲ』）國立國語研究所報告39 P.10～11

<表3> 日本語の「基幹語彙」の分布 (廣さと深さ)

廣さ 深さ	5層		4層		3層	
	異語	延語	異語	延語	異語	延語
累積50% (極めて深い)	A5 291	190,977	A4 124	33,155	A3 54	26,204
累積60% (かなり深い)	B5 168	19,353	B4 166	18,552	B3 93	10,320
累積70% (深い)	C5 214	12,964	C4 316	18,857	C3 232	13,362
累積80% (中位)	D5 207	6,098	D4 499	13,770		

<表4> 韓国語の「基幹語彙」の分布 (廣さと深さ)

廣さ 深さ	5層		4層		3層	
	異語	延語	異語	延語	異語	延語
累積50% (極めて深い)	A5 320	186,118	A4 78	28,023	A3 53	19,088
累積60% (かなり深い)	B5 173	20,628	B4 109	12,904	B3 83	9,821
累積70% (深い)	C5 248	16,375	C4 212	13,429	C3 177	11,395
累積80% (中位)	D5 238	8,075	D4 389	12,300		

上記の<表2>と<表3>は全体の資料の「廣さ」と「深さ」の分布から見て多方面にわたって高い割合で現れると判断される語彙を「基幹語彙」として選定したものである。どこまでを上位、つまり、深い語であると言えるのかは判断しにくい、本稿では、累積使用率の分布から見て50%までを「極めて深い」、60%までを「かなり深い」、70%までを「深い」、80%までを「中位」、90%までを「浅い」それ以下を「かなり浅い」の六つの分野に分け、累積使用率80%以下に属する語彙を「深さ」の基準にした。そして、「廣さ」の基準は、累積使用率50%から70%までは3層以上にわたって出現する語彙を取り、累積使用率80%までの語は4層以上にわたって出現する語彙を選定の基準にした。その結果、下記の<表3>と<表4>において、太い線で囲ってある部分に属する語彙、日本語2,362語、韓国語2,079語を「基幹語彙」として選定した。

4. 意味分野別構造分析法による考察

4.1 意味分野別構造分析とは

意味分野別構造分析を行うためには『分類語彙表』のコードと新設のコードを用いて単語コードを付け、その単語コードを集計し、いかなる意味分野の語彙がいかなる割合で構成されているのかを示す。『分類語彙表』のコードは、整数部分が（1. 体の類、2. 用の類、3. 相の類、4. その他）のように品詞論的な4分類になっており、小数部分は、4桁までの分類になっているが、どこまで細かな分析を目指すかによって小数点以下何桁まで用いるかは異なってくるのである。廣瀬英史(2000)は、コードの使い方による意味分野別構造分析法として、5種類を挙げて各分析法の特徴について述べているが、全体的傾向を捉えるのに適した分析法は「部門別（小数第1桁まで）・グループ別（浅見徹1971の表による分類）・中項目別意味分野別構造分析法（小数第2桁まで）」であるが、その中でも「中項目別意味分野別構造分析法」が全体的傾向に加え、語彙の特徴を詳細に見ることが出来る分析法であると述べている。本稿では、「中項目別意味分野別構造分析法（小数第2桁まで）」による分析を行ってみる。分析の手順としては、まず、選定した「基幹語彙」の単語コードを用いて品詞別、語種別、全体の意味分野別構造分析の三つの分析を全部行って、出現に有意差が生じている項目を指摘し、その特徴について考察してみる。なお、その差をより客観的に指摘するため、統計技法である χ 自乗検定⁸⁾を行う。

4.2 単語コード付けの基準

比較語彙研究において「意味」を比較の中心に捉えて語彙を分析する意味分野別構造分析法では語彙を構成する個々の語にカテゴリー化した意味分野に当てはまるコードを与えなければならない。そのコードには単語コード(WC : Word Code)と語素コード(LC : Lexeme Code)の二種類がある。各々のコードは基本的に日本語の『分類語彙表』のコードを用いるのであるが、『分類語彙表』では一部にしか収録されていない複合語のコード、附属語のコードなどに對しては種々工夫を凝らしてきた。田島毓堂・廣瀬英史(1997)をもとにして現段階における比較語彙研究のコード付けに関する基本方針と詳しい基準は田島毓堂(2000)に集約されている。なお、韓国語のコード付けの基準については申政澈(2001)に述べられている。

その基本方針というのは『分類語彙表』に従ってコード付けをするが、造語成分・接尾辭を伴った語、複合サ変動詞、アスペクトを示す動詞を伴った複合動詞などに関する単語コード

8) χ 自乗検定は、規模の異なるA、B二つの標本において、特定性質を持つものがA標本ではa例、B標本ではb例あり、特定性質のないものがA標本ではc例、B標本ではd例あったとした場合、それぞれの標本の規模を考慮に入れても、aとbとで差が認められるかどうかを検定する統計技法である。

は、それぞれの主要部分によって付ける方法である。

4.3 品詞別、語種別、全体の意味分野別構造分析

下記の〈表5〉は、品詞別、語種別、全体の意味分野別構造を中項目別意味分野別構造分析法（小数第2桁まで）を用いて分析を行った結果、 χ 自乗検定により10%以下の危険率（逆に言うと90%以上の確率）で出現に有意差が生じていると判断される項目を示したものである。品詞の分類は、『分類語彙表』の「1. 体の類（名詞）、2. 用の類（動詞）、3. 相の類（形容詞、形容動詞、連体詞、ある種の副詞）、4. その他（接續詞、感動詞、ある種の副詞）」の4分類に従っている。なお、語種の分類は、固有語・漢語・外來語・混種語の四つに分けている。

〈表5〉品詞別、語種別、全体の意味分野別構造分析

分野		日本語が有意に大	韓国語が有意に大
品詞別	体の類	1.30(153:102)、1.42(9:1)	1.31(47:58)
	用の類		2.34(14:23)
	相の類		3.10(28:42)
	その他		
語種別	固有語	1.44(10:1)、2.11(24:8)	1.31(16:27)、2.34(8:15) 3.10(21:32)、3.19(56:67)
	漢語	1.30(113:84)、3.19(25:11)	1.11(28:42)、1.17(33:50)
	外來語		
	混種語	1.30(4:0)	
全 体		1.30(153:102)、1.42(9:1)	1.31(47:58)、3.10(28:42)

* () の中は、日本語：韓国語の語数

上記の〈表5〉において三つの分析のうち、有意差の生じた意味項目を見てみると、ある一つの分野のみにおいて差が生じた意味項目、二つの分野において差が生じた意味項目、三つの分野において差が生じた意味項目がある。

語種別の〈1.44〉（住居）、〈2.11〉（関係・異同）においては、日本語の固有語の占める割合が韓国語のそれより高いし、〈2.34〉（行爲）の項目は、品詞別においても語種別においても韓国語の固有語の占める割合が日本語のそれより高く現れている。

また、〈3.19〉（量）のように、漢語では日本語に多いが、固有語では韓国語に多い場合もある。なお、〈1.11〉（類・例）、〈1.17〉（空間・場所）においては、韓国語の漢語の占める割合が日本語のそれより高く現れている。これらは、両言語の「基幹語彙」における語種別の特徴であるが、一言語体系においても同じ傾向であるのか注目してみる必要があると思う。

しかし、〈1.42〉（衣類）、〈1.30〉（心・意識）、〈1.31〉（言語・名）、〈3.10〉（こそあど）のように、品詞別、語種別における有意差が全体の分析結果でも現れる意味項

目があるが、これらは、兩言語の「基幹語彙」における最も大きな特徴であると思われる。以下においてはその特徴について詳しく述べてみることにする。

(1) <1.42> (衣類) — 日本語が有意に大である

この意味項目に属する日本語には「糸、レース、着物、服、洋服、帽子、靴、傘、布団」の 9 語が含まれているが、韓国語には、「옷 (服)」の 1 語のみである。韓国語においてもこれらの語は上位に位置してもよさそうに思われるが、なぜか「基幹語彙」には少ない。ただ、全体の資料の累積使用率 90%以下で、4・5 層において、「양복(洋服), 모자(帽子), 구두(靴), 우산(傘), 이불(布団)」の 6 語が見られる。この項目における差は日本語の上位語における特徴であるかどうか現段階では判断しにくい。いずれ報告することにする。

(2) <1.30> (心・意識) — 日本語が有意に大である

この意味項目では、異語では日本語が大であるが、延語においては(韓国語 15,095 語、日本語 13,885 語)逆転している。この意味項目に含まれている日本語には韓国語との対応関係において、「心・氣: 마음 (心)」、「氣(感覺)・感じ・感覺: 느낌 (感じ)」、「氣持・氣分: 기분 (氣分)」、「考え・思い・考え方: 생각 (思い)」、「考え方・生き方・方法・仕方・方式・遣り方・見方・言い方: 방법 (方法)・방식 (方式)」のように同義・類義の関係にある語が韓国語に比べて多いのが特徴である。

特に、日本語の「考え方・生き方・遣り方・見方・言い方」のように「動詞連用形+方」からなる派生名詞は韓国語では、主に「~하 (する) /-는 (語尾) /법・방법・방식 (法・方式・方法)」のように一つの句として現れるので、一語としては認められない。実際に、この項目の延語において「法(韓国語 237 語、日本語 87 語)、方式(韓国語 119 語、日本語 47 語)、方法(韓国語 284 語、日本語 131 語)」のように、日本語より高い頻度で現れているのはそれを裏付けている。このような語構成の違いがこの項目において出現に有意差が生じている一つの原因であると言える。

(3) <1.31> (言語・名) — 韓国語が有意に大である

この意味項目に属する韓国語には、名と関連のある語が「이름 (名前)、강 (姜)、김 (金)、박 (朴)、서 (徐)、신 (申)、심 (沈)、안 (安)、오 (吳)、류 (柳)、윤 (尹)、이 (李)、임 (林)、장 (張)、정 (鄭)、조 (趙)、진 (陳)、최 (崔)、홍 (洪)、황 (黃)」の 20 語がある。しかし、日本語には「名、名前、石田、伊藤、片山、田中、林(姓)、藤原」の 8 語しかない。この項目で差が生じているのは韓国語において苗字に關する語が多いためである。日本の苗字は、約 30 万姓があるとされている⁹⁾。この約 30 万近い

9) 丹羽基二 (2002) 『日本人の苗字 三十万姓の調査から見たこと』光文社新書 P 5 ~ 6

苗字の中で、7000傑の苗字で全人口の約96%強をカバーしていると言う¹⁰⁾。一方、韓国には代表的な「김 (金) 、이 (李) 、박 (朴) 」を始め、286の苗字が存在すると言う¹¹⁾。日本の苗字は韓国に比べて圧倒的多数を占めているが、韓国に比べて数が多いため、広い範囲で現れることはあるが、その分、高い頻度では現れにくいという面があると思われる。実際、本稿の資料においてただ一つの分野においてのみ出現するいわゆる「基調語彙」を除外した日本語（延べ455,091語、異なり12,655語）、韓国語（延べ427,619語、異なり11,306語）の中で苗字は日本語（延べ1,628語、異なり140語）、韓国語（延べ3,998語、異なり53語）のように異なりでは日本語のほうがほぼ3倍近く多いが、延べでは韓国語のほうがほぼ2.5倍ぐらい高い割合で現れているのはそれを裏付けている。

(4) <3.10> (こそあど) - 韓国語が有意に大である

この項目に属する韓国語には日本語と比べて「올바르다・옳다 (正しい)」、「그러하다・그렇다 (そうだ)」、「이러하다・이렇다 (こうだ)」、「어떠하다・어떻다 (どうだ)」のような同義・類義の関係にある形容詞が多い。また、「이・그・저・어느 (こ・そ・あ・ど)」と関係のある形容詞から派生した副詞と冠形詞（日本語の連体詞に当たる）が多く含まれているのが特徴である。その例は次のとおりである。

- ・ 이렇다(こうだ)〈形容詞〉→이렇게(こう)〈副詞〉、이리(こんなに)〈副詞〉、이런(こんな)〈冠形詞〉
- ・ 그렇다(そうだ)〈形容詞〉→그렇게(そう)〈副詞〉、그리(そんなに)〈副詞〉그런(そんな)〈冠形詞〉
- ・ 어떻게(どうだ)〈形容詞〉→어떻게(どう)〈副詞〉、어떤(どんな)〈冠形詞〉

なお、韓国語において、共に日本語の「どうだ」に対応する不定の意味を表す形容詞「아무렇다」と性質や状態の意味を表す「어떻다」があり、日本語には存在しない「내 (私の) 、네 (君の) 、무슨 (何の) 、제 (私の) 」のような人称と関係のある冠形詞があるのが特徴である。

10) 「日本の苗字七千傑」(<http://www.myj7000.jp-biz.net>) 参照

11) 金圭仙 (2003) (<http://www.dnue.ac.kr/~kskim>) 「2000人口住宅総調査結果姓氏および本貫集計の概観」参照

5. まとめと今後の課題

本稿は、語の集合としての語彙を扱う語彙総体論の立場から集団的規範語彙としての「基幹語彙」を選定し、比較語彙論的方法による語彙の比較研究を行ってみた。その目的は日本語と韓国語の基幹的な語彙における差を指摘し、その特徴を明らかにするところにあった。分析の結果、〈1.44〉(住居)、〈2.11〉(関係・異同)の項目では、日本語の固有語の占める割合が高く、〈2.34〉(行爲)の項目は、品詞別と語種別において韓国語の占める割合が高いことが分かった。また、〈1.11〉(類・例)、〈1.17〉(空間・場所)の項目では、韓国語の漢語の占める割合が高く現れている。なお、〈3.19〉(量)のように、漢語では日本語に多いが、固有語では韓国語に多い場合もある。そして、〈1.42〉(衣類)、〈1.30〉(心・意識)、〈1.31〉(言語・名)、〈3.10〉(こそあど)のように、品詞別、語種別における有意差が全体の分析結果でも現れる意味項目がある。これらは両言語の「基幹語彙」における最も大きな特徴であると思うが、他の調査からも同じ結果が得られるのか今後注目してみる必要があると思う。

このように、従来語彙総体論の観点からは捉えられなかった意味的側面における特徴を明らかにしたことから比較語彙論研究の意義および有効性は示すことが出来たと思う。しかし、意味分野別構造分析法により有意差が指摘された意味分野に對し、明確な原因の究明までには手が届いていない。より詳細にその原因を究明するためには、もっと細かな分析方法が必要であろうし、有意差が生じている意味分野だけでなく、類似する意味分野に對する分析も行ってみる必要があると思う。それは今後の課題とする。

【参考文献】

- ・ 浅見徹(1971)「古代の語彙Ⅱ」,『講座國語史3 語彙史』,大修館書店.P.75~165
- ・ 國立國語研究所(1964)『分類語彙表』,大日本図書
- ・ 阪倉篤義(1960)「万葉語彙の構造-(その一)名詞について-」,『万葉』34 P.75~85
- ・ 申政澈 (2001)「日韓語彙の比較研究-「小學生基本語彙」を對象として-」,『開發・文化叢書37 比較語彙研究の試み7』,名古屋大學大學院國際開發研究科 P.5~42
- ・ 田島毓堂 (1992)「語彙論の課題-集団的規範と個別的實現-」,『名古屋大學國語國文學』71
- ・ 田島毓堂 (1995)「比較語彙論の構想-異文化比較研究のために-」,(『國際開發研究フォーラム 2』,名古屋大學大學院國際開發研究科)
- ・ 田島毓堂 (2000)「コード付けの諸問題-單語コードと語素コード・比較語彙論のために(その4)-」,『開發・文化叢書35 比較語彙研究の試み5』,名古屋大學大學院國際開發研究科

P.247~266

- ・田島毓堂・廣瀬英史 (1997) 「語素コードに関する提案-比較語彙論のために(その2)-」, 『「語彙研究法」報告2 語彙研究の可能性』, 名古屋大學大学院文學研究科 P.63~75
- ・田中章夫 (1978) 『國語語彙論』, (明治書院) P.1~2
- ・土屋信一 (1992) 「基幹語彙の探索」『文化言語學その提言と建設』, 三省堂
- ・丹羽基二 (2002) 『日本人の苗字 30万性の調査から見えたこと』, 光文社新書 P.5~6
- ・林四郎 (1971) 「語彙調査と基幹語彙」(『電子計算機による國語研究Ⅲ』), 國立國語研究所報告39 P.10~11
- ・廣瀬英史(2000) 「比較語彙論的方法による語彙研究の可能性とその方法」, 『開發・文化叢書31 比較語彙研究の試み4』, 名古屋大學大学院國際開發研究科. P.123-139
- ・「日本の苗字七千傑」(<http://www.myj7000.jp-biz.net>)
- ・金圭仙 (2003) (<http://www.dnue.ac.kr/~kskim>) 「2000人口住宅總調査結果姓氏および本貫集計の概観」

K C I

要 旨

本稿は、語彙總体論の立場をとり、対象語彙としては、複数の資料(小説、新聞、教科書、雑誌)を語彙調査して、その中から多方面にわたって出現しながら割合よく使われる語彙を「基幹語彙」として選定する。それは日韓両言語にとって基幹部を成す重要度の高いものであると言えるのであり、それを比較の対象として用いるので本稿は集団規範語彙における比較語彙研究になる。

次に、比較の方法であるが、語彙の意味という観点に重点をおいて比較する。意味というものは、ほぼユニバーサルな存在であるから他言語との比較が可能であるだろうし、品詞別、語種別からは捉えられなかった語彙の種々の姿を把握することができるのである。そのため、意味を數量的に扱う必要があるがそれを可能にしたのが「比較語彙論」でいう「意味分野別構造分析法」(The Structural Analysis of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories)である。意味分野別構造分析法では、語彙の構成要素である個々の語に意味コードを与え、それを集計して分析を行う。選定した日韓「基幹語彙」を中心に比較語彙論の分析方法である意味分野別構造分析法を使って出現に有意差が生じている意味分野を指摘し、各意味分野別構造の特徴を明らかにするところにある。分析の結果、有意差が生じた項目に対する詳細な原因の究明までは手が届いていないが、従来の語彙總体論の観点からは捉えられなかった意味的側面における特徴を明らかにしたと思う。

キーワード：語彙・語彙元素論・語彙總体論・比較語彙研究・基幹語彙・基調語彙・
意味的側面・數量的側面・意味分野別構造分析法

투 고 : 2005. 5. 31
1차 심사 : 2005. 6. 11
2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所 : (300-718) 대전시 동구 자양동 17-2번지 우송대학교 일본어학과
電 話 : 042-630-9797
e-mail : kimjs3396@hanmail.net